

吉田文化会館だより

題字：佐藤政博さん

第 132 号
2020年7月

今年は、ヒロシマに原爆が投下されて75年の節目の年です。
今月は、原爆投下の直後からヒロシマに入り、自らも残留放射線
で被爆した土屋圭示さんのインタビューをお届けします。

八月六日ヒロシマの記憶

当時17歳の兵士だった私は、爆心地から約13km離れた江田島水上特攻基地にいました。

八月六日の朝、上官の食事当番だった私は、「小隊長殿に用事、食事を持って参りました」と大きな声で部屋に入っていました。その瞬間に、「ピカッ」とせん光が走り、同時に、「ドッカーン」というごう音が鳴り響いたのです。目の前が真っ白になり、私は「何が起こったんじや」とその時は理解できませんでした。外を見ると、上や横にもくもくと広がる「きのこ雲」が見えたのをよく覚えています。

その日の午後二時には、救助のためにヒロシマの町に入ったのですが、昼間なのに薄暗く、町中が煙つていて異様なニオイがしていました。私は、主に太田川に流れてくる数え切れない遺体の火葬を行いました。朝から晩まで流れてくる遺体を川から引き上げ、服に着いている名札から名前や血液型などを記録し、重油をかけて茶毘に付しました。

最後に敬礼してお別れをしましたが、青白く燃える炎を今も夜になると思い出します。



私の使命

原爆が投下されて長い年月が経ちましたが、私が見たあの「ヒロシマ」は今でも思い出すことがありますし、頭から離れません。

ヒロシマを体験した私は、「こんなひどいことは放っておけない」、「私が体験した本当にむごい現実を、これらの人に見させてはいけない」と絶対に味わせたくなかった。強い使命感で生きてきました。これまで原爆の悲惨さを訴えるために、アメリカへ数回行きましたし、講演にも行ってきました。今92歳ですが、原爆のことは、どこにでも出向いて行き、話しておきたいという強い思いは今でも変わりません。

子どもたちに伝えたいこと

私は、学校へ出向いて児童生徒の皆さんに原爆のお話をすることがありますが、皆さん真剣な眼差しで聴いてくれます。子どもたちには、「原爆の恐ろしさ」「原爆は二度とあってはならない」「私たちの力で核兵器をなくしていかなければならない」ことを深く強く心に刻んで、決して忘れないでもらいたいと願っています。また、私もそうですが、被爆者が高齢化し伝承することが難しくなってきた、原爆の記憶が薄れていると感じます。ですから、「本当にむごい原爆は二度と使ってはならない」ということを子どもたちの教育の中でしっかりと伝えて欲しいと思います。そして、みんなで力を合わせて、原爆のない平和な世の中を築いてほしいと強く望んでいます。



笠岡市非核平和都市宣言
啓発実行委員会
委員長 土屋圭示さん

人権啓発標語 優秀作品発表

笠岡市企業等人権問題連絡協議会が募集し、11事業所から523点の作品の応募がありました。その中から次の作品が選ばれました。

(最優秀)

One Team

みんなで築こう

ひとつの心

ローム・ワークス(株)

川上 佳孝さん

(優秀)

ありがとう

笑顔2倍の

あいことば

笠岡信用組合

安田 美佑さん

(優秀)

多様性

認める心の寛容性

それが未来の可能性

ローム・ワークス(株)

池田 俊一さん

(優秀)

差し伸べる

小さな勇気に

咲く笑顔

笠岡市役所

水田 理夫さん

人権 まんが 未来ちゃん

第56回 オリンピックへの女性の参加

作画 南一平

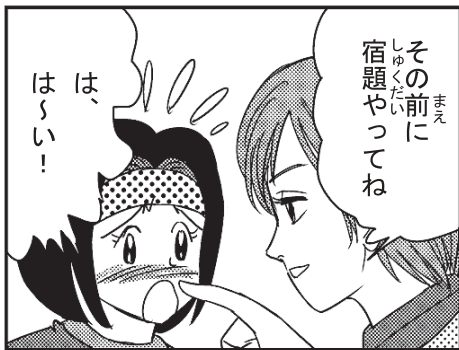
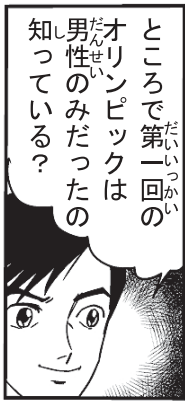
人権まんが 解説

来年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックでは、多くの女子選手の活躍が期待されていますが、日本の女子選手が金メダルを獲得したマラソンや柔道、レスリングなどは、近年になってから女子種目になったものです。

現在では、ほとんどの種目で女性が参加できますが、それには、女性の地位や役割の向上を目指す活動がありました。一九七〇年代、女性の地位向上や男性と平等な権利の獲得などを目指した「ウーマンリブ運動」や一九九四年、スポーツに女性の参加を可能にし、スポーツ文化の発展を目的として採択された「ブライトン宣言」など、女性の人権獲得の歴史があります。

スポーツの世界では男女平等が進んでいますが、私たちが暮らす社会はどうでしょうか。日本は世界と比べて男女の格差は大きく、男女格差を測る二〇二〇年版「ジェンダー・ギャップ指数」では、世界153カ国中121位と過去最低を記録しました。

このことから、男女が同じように活躍する「男女共同参画社会」の実現は喫緊の課題となっています。私たちの力で、地域や会社、家庭などあらゆる場面において男女格差の解消を目指し、活気があふれる豊かな社会を築いていきましょう。



※eスポーツとは、「エレクトロニック・スポーツ」の略称で、コンピュータゲームなどを複数人で集まって競技するスポーツのこと。東京オリンピックに合わせて、eスポーツ世界大会も開催が予定されている。

笠岡市人権文化祭

まつむらさとひろ
松村智広さん講演録

演題 「へこたれへん く人はきつとつながれる」

2月14日・15日に第33回笠

岡市人権文化祭を開催しました。「人権を考える集い」では、松村智広さんを講師に迎え、部落問題についてご自身の体験に基づくお話を、笑いやユーモアを交えても分かりやすくお話をいただきました。

部落差別のことについてお話しします。差別意識が表面化することが多いのは結婚の時です。相手が被差別部落出身だと分かれると反対されることがあります。この問題について、「一人では何もできない」という考えがありますが、私は、一人が変われば世の中は大きく変わると信じています。



松村智広さんプロフィール

1957年、三重県生まれ。大学を卒業後、中学校の英語教員となる。その後、三重県人権センター調査研究員、反差別・人権研究所みえ主任研究員、三重県教育委員会人権教育課長、伊賀市立大山田中学校長を歴任。

現在は、ライトピアおおやまだ(隣保館)館長を勤めながら、みえ人権教育・啓発研究会代表をしている。

一例をお話しします。近所に住む女性が3年間結婚に反対されていたが、反対している家の親戚の一人が人権の講演会を聞いて行動を起こしました。反対している親に

「娘の結婚相手の住んでいるところで反対しているらしいけど、娘は親の持ち物と違うで。人生の主役は本人やから本人にまかしたらええんところがうか。」と親を説得してくれて、次第に心の氷はとけていき二人は結婚しました。反対していた親はよく夫の地区に來ますが、今では「來てみたら案外よかった」と言っています。反対されている時、その親に歴史を正しくお話し、

理解してもらいました。人は話せばわかるものです。私心のあふれる人が圧倒的に多いと思っています。

こんなこともありました。被差別部落出身の男性は、結婚するまで自分が被差別部落出身であることを話していませんでした。結婚後、部落問題について夫婦で話すことがあり、その時初めて被差別部落出身であることを明かしました。すると妻は、部落のことをよく知りたいと言いました。これまで、道から向こうで遊んではいけないとか、結婚を反対する大人がいることを聞かされていて、

「何で線を引くの、不公平なことがあるんだな？」と不思議に思っていたそうです。

二人は部落問題の疑問を解消し真実を知るために、私が書いた本を読んで勉強しています。夫は後に、妻の親に被差別部落出身を伝えると、

「二人が、好き同士なら一切関係ないですよ」って理解してくれたそうです。被差別部落出身を反対する人もいれば、理解して応援してくれる人もいます、人の善し悪しを住んでいる場所で決めるのはおかしいことです。

被差別部落で生まれ育った私の祖母は103歳の時に体調を崩し、「介護老人保健施設」に入所しました。ある日見舞いに行くと、祖母が「智広 許してくれよ」と言うのです。そこではみんな一緒に食事をするので、隣になつた人から「松村さんはどこの地区ですかって聞かれたんで隣の地区を言うてしまった、みんなわしのこと知らんから隠したんや」と話してくれました。私は返事に困りました。次の日にいくと、また

もう隠さんでええで。話せばわかる人もいっぱいいる。そんなこと気にせん人はいっぱいいる。ばあちゃん。明日から地区を聞かれたら正直に自分の住んでいるところの名前を言うたらええんやで」って伝えました。祖母は「うん、そやな。」と口では言っているが、悔しい気持ちで目は泣いていました。そんな祖母の悔しさをバネに、もつと人とつながって生きていきたいと思えます。

私は、人権を学ぶことは「自分自身の内面をのぞく鏡を持つ時間」だと思います。自分の事は一番わかっているようで、実は一番わかっていないものです。ですから人権を学ぶことで、自分の考えと自分の未来をちよつとぐらいたら変えられそうです。そして、自分を変えることができれば、相手にも影響を与えることができるのかなと思うのです。皆さんも自分の内面を見つめる時間を持っていたら、より良い人生を歩んでいただくことを願っています。

吉田文化会館だより ③